
in the darkness

エリザベス・ブラウン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

in the darkness

【ΖΖコード】

Ζ2535W

【作者名】

エリザベス・ブラウン

【あらすじ】

新聞記者ウイルは、恋人にプロポーズをする。

幸福に包まれる二人。

彼女が落とした片方しかないピアスが
互いに隠していた過去をしらしめ、それは交差し
皮肉な運命を映し出す。

彼女の片方しかきちんしていない耳、
謎の女と男、

家族の愛、

皮肉な運命、

若い一人は克服し、未来を築けるのか

第一話 恋人たち（前書き）

1950年代前後のアメリカ文化に憧れます。
帽子とスーツの男 ワンピースに白い手袋の女
カクテルと煙草と洒脱な会話にロマンスと謎が溶け込んで
ほんのひと時、甘辛い夢を見てほしい。

第一話 恋人たち

今夜は、夕立の後の湿った水たまりもしかめつ面をせずに受け止められる。

ウィルは、ポケットに入れた大事な物を落とさないよう、しつかり手で押さえながら路地の最後の水たまりを飛び越えた。ネクタイが跳ね上がり、頬を打つたが舌打ちをする気にもならない。

暗いトンネルをぬけた先には、ささやかだがにぎやかな市場が広がる。どの店も夕闇にまけまいと裸電球をかけ、その熱い光の影にまけまいと笑顔で客を迎えるなり、招いたりしている。

ウィルは、いつもの花屋の前に足をとめ、スーツのもう一方のポケットに手を入れた。

「毎度。兄さん。今夜はどれにするね？ 遅咲きのチューリップは？」
店主は、一本を彼の目の前に突き出した。

いつもの彼ならばそれを小銭と引き換えに受け取り先を急ぐ。でも今夜はそうはいかないのだ。

「親父さん！ これで買えるだけじゃないか？」

ウィルは札を付き出した。

「おやおや。特別だな。よし！ おまけだ！」

店主は、大きなバケツに入つた色とりどりのバラをそのまま抜きだすと

手早く新聞紙に包んでくれた。

「ありがとう！」

目指す、アパートはすぐに表れた。

世紀末からある煉瓦作りのクラシックな建物は趣こそあるが道は悪く、雨が降れば、湿つた空氣と下水の悪さから嫌なにおいがあがつてくるし、

少しばかり地面にのめりこんで最大級の水たまりが玄関までの道をふさいでいる。ウィルは慎重にそれをまたぐと玄関先に入りこんだ。

3階までのらせん階段を一段おきに飛び上がってゆく。

あつちといつちの家の夕食の匂いが混じつて鼻をくすぐる。

クイズ番組に本気で答えて一喜一憂する大声。

赤ん坊の泣き声。

若い母親の子守歌。

子供の足る足音

叱る親の声。

今夜は、すべてが騒音ではなく、温かい励ましの声に聞こえる。

目指す部屋のドアは、神々しく光輝いてみえる。

ウィルは、はやる気持ちをおさえ、ドアをノックした。

第一話 片方だけのピアス

そのノックはいつもより、ずっときびつて丁寧に聞こえた。フローレンスはすぐに鏡に顔を映した。髪のカールは、この上なくうまくいった。ドレスもきれいだ。

白いオーガンジーの襟がついたブルーのドレスは、彼がもつとも好きなドレスだ。

もつとも、よい夏服はこれ一枚きりだから、これを着ないわけにはいかない。いつものように耳を覆うようにセットしている髪を少し上げてちゃんとしている方の左の耳を出して、そこについているピアスを見つめた。

彼女にとつて、そのピアスは、命と同じに大切な物。手で大切に触れ、急いで髪を直すとドアを開けた。

彼女の優しい笑顔が現れた。

ウィルは、いつもそうするように小柄でやわらかい丸みのある体を抱きしめキスをする。きれいな髪をなでてみたいが、フローレンスは片方しかちゃんとしていない耳を誰にもさわられたくないし、見せたくないのを知っているので、彼女の細い首までしかふれないようしている。

ウィルはそういう気持ちを汲んでやるのを、他人行儀とは思わなかつた。

自分だけに、事故で少し形がないのだとおしえてくれた。それだけで十分だつた。

「まあ！バラの花だわ！こんなにたくさん！」

フローレンスは花に埋もれながらリビングに進み、すぐにテーブルの花瓶に花を挿した。

どうやら、読まれている。

この家にこんな大きな花瓶はない。お隣に借りてきたのだろう。

「今日は、時間通りだわね。お仕事は大丈夫なの？」

フローレンスは、気持ちを抑えながら、うわずりそうになる声をあさえて、いつもと同じようしゃべる事に努めながら、きれいなハシバミ色の瞳を向けた。

ウィルの仕事は新聞記者だ。

約束の時間などありそうでないのをあたり前に受け止めていた。

突然、頭ふたつ上にあるウィルの顔が下に落ちた。

彼は、床に片膝をつくと、ポケットから指輪を取り出すとフローレンスにささげた。

彼が買える範囲で買ったダイヤモンドの指輪が光った。

「フローレンス・チエンバース 僕と結婚してください」

フローレンスは、今夜、彼がプロポーズするとはわかつていた。

ここは小さな町だ。

おととい宝石屋から出でてくるウィルを同僚が見つけ、彼女に報告してくれていた。

そして今夜は一年前に一人が初めてデートした日。

きっと今夜とわかつていても、こうして言われると胸は熱くなり、フローレンスは、早くイエスと言いたいのに喉に声がつまってしまつた。

「フラン。イエスなら口を覆う手をはずして、その手はこっちに出して……」ウィルはおどけた口調で言った。

彼女がその通りにすると、静かに差し出された左手にウィルはその指輪をはめ、その手をとつたまま立ち上がつた。

いつもの位置に彼の少し幼さが残る顔がもどつた。

フローレンスは、つま先だつてウィルの肩に抱きついた。

もちろん左側に。ちゃんとした耳の方をウィルの頬に近づけた。

「ここは、静かだけどすぐ水たまりできるし、僕の所は、騒音がひどい、少しばかり静かで水がない家を急いで探そう。当面は一人で働けば、すぐに夢もかなうよ」

一人の夢は郊外に家を持ち、大きな犬とかわいい猫を飼うことだ。
「ええ… そうね。」腕を肩にあずけたまま、幸福に輝く笑顔を向けてくれた。

その時…。

何か小さなものが床に落ちて、その大きさのわりに大きな細い甲高い音を立てた。

フローレンスは、さつき触れたピアスがゆるんで落ちたのだとわから、すぐにしゃがむとそれを拾い上げようとしたが、ウィルの方がそのピアスを先に拾い上げていた。

彼女は、少し頬を赤くした。

それは耳を隠しているのにピアスなどしていたのを知られてしまつたのが恥ずかしかつたからだ。

でもなぜこんな事をしているのかウィルに話さなければならぬ。それは、ずっと躊躇していた事だ。

「あのね。ウィル。わたし、あなたに…」 フローレスは思い切つて顔を上げたが彼女の顔はさつきの雨を降らした、雲のように暗く、くぐもつた。

ウィルが

そのピアスを真つ青な顔で見つめていた。

「ウィル? どうしたの…」

ウィルはそのピアスから目が離せない。

そのピアスは、小さいわりにずつしりと重い金細工。小鳥がくちばしにダイヤモンドの花をくわえている。ダイヤは、小さいが素晴らしい虹色に輝く。そんな馬鹿な… フローレンスがこれを持っているついているとは…。

『もう片方は、わたしの大切な人が持っているの』

『あのダイヤモンドで1年遊んで暮らせるぞ』

懐かしい彼らの声が聞こえる…

第三話 美しい女

「ウイール！」フローレンスが肩にふれ、ウイールは我に返った。
彼女の手を優しく遮ると、部屋に進み、小さなソファーに倒れ込んだ。

彼女は隣に座り、ウイールの背に手をかけよじしてやめた。

ウイールは、膝に腕をあずけ手は額を覆っている。

そのいつも楽しい輝きの青い目は床をみつけ、瞳は忙しく左右に動いて
いるのがわかつた。

フローレンスは、思つた。ウイールは新聞記者だ。
まだ新米なので扱うのは、どこでフェスティバルがあつて、そこの子供

たちの笑顔とか新作のおもちゃの記事だつたりだが、隣の部署では毎日おこる事

故や事件を追つてゐる。

裏社会の情報も山ほど入つてくる。

彼もいつかは、事件記者になるのが夢なのでその手の情報には常に耳をすましている。

どこかで…このピアスの片方を持つていてる女の事を知つたのかもしない。

この世界にひとつ個性的なピアス。

他にも細かい事を知つてゐるのだろうか。

でも。すべては遠い街の事件。ここまで耳に入るだろうか。

彼女は、探るような気持ちを抱きながら、話かけた。

「ウイール…ピアスを返して。それはわたしにとつて命と同じに大事な物

なの…もう片方は姉が持っているのよ。離れていても、いつも一緒にいられるように…」

ウィルは、フローレンスを見ずにピアスを渡してきた。

彼女は受け取ると、髪にかくした耳につけた。

ウィルの頭の中では、抑え込んだ記憶の渦が幾重にも大きくなつた。

幼い自分の手を引く、温かい手のぬくもり。

背の高い大きな影

けぶる金髪に吸い込まれそうな青い瞳。

陽気な赤毛の太った老婦人

白いドレス

片方のピアス

口の悪いドクター

管を流れる血

ウィルは、ゆっくりと顔をあげ、横に座るフローレンスに向いた。彼女は、顔を下に向け、真新しい指輪をはめた手を強く握りしめていた。

「わたしが最後に姉に会ったのは16の誕生日よ…。後は毎年、誕生日

とクリスマスに手紙とプレゼントが送られてくるだけ、それも18の時に

途絶えたわ。今はどうでどうしているのか。生きているのかさえわからぬ

そのやさしいハジバミ色の瞳は、悲しい色を浮かべ揺れている。知っている女の面影を彼女のの中に見つける事はできない。どこか似ていたら、もつと早くに気づいただろうか。

『事故で耳が…』

それを聞いても抑えこんだ記憶は振り戻されなかつた。

ウィルは、大きく息を飲みこんだ。

彼女は立ち上がり、テーブルに進むとワインをグラスに注ぎそれをウィルに渡した。

ウィルは素直にそれを受け取ると飲んだ。

乾いた口をアルコールが満たし、すこし樂にしてくれた。

「姉が…普通の暮らをしていないのは知っているわ…姉の事…何かにあつたの？」

ウィルは顔を大きく振つた。

「違う。フラウ。記者として彼女の事を知っているんじゃないんだ」

フローレンスは、胸がざわめいた。

「僕は、エレノアに会つた…まだ。子供のころに

あの夜

銀狐のショールを肩にかけ、真っ白なイブニングドレスの裾から銀色の靴が見えた。

玄関ホールに現れたエレノアは、映画のスクリーンから抜け出たようだつた。

「子供は寝ている時間よ。坊や」

その迫力ある長身から、もつとハスキーな声を想像したが彼女の声は、とても甘くて優しい。

ウィルは階段の踊り場で文字通り固まつてしまつた。

階下のドアが開いて閉まり、ドートを羽織りながらフランクが出て、エレノアのそばによると彼女の田線が上にあるのに気づき、彼はウイルの姿をとられた。

タキシード姿のフランクは初めて見たけど、やっぱり映画の俳優みたいだ。

「ミセス・マクフラスキー！」フランクは奥に向かって声をかけた。
「旦那様？お忘れ物ですか？まあ！ウイル坊ちゃん！いけません」
ミセ

ス・マクフラスキーはその大きな体のわりに俊敏な歩みで階段を駆け上

がるとウイルの肩をかかえて、部屋に戻した。

「アンナ。のどがかわいたんだ。夕飯のお肉がからかった」

「ミルクをお持ちしますよ。さあベッドにはいって」

ウイルは、いつまでも子供扱いなのにむくれてベッドに入った。

「フランクおじさんが帰つたら教えてついていったのにーおじさんは今度帰つた時はチエスを教えてくれる約束したんだ」

「旦那様はお着替えによられただけです。夜会服をお召しでしたでしょ？」

急なおよばれだつたよつです。また、しばらへはお帰りになつませんよ」

「あのきれいな女の人は誰？」

「パーティーは女性同伴ですよ。旦那さまだつてガールフレンドのお一人やお二人おいでになりますよ。さあいい子にしていてください。

ミルクを温めますからね」

「叔父に初めて会つたのは、両親の葬式の時だ。残された10歳の子供を

遠い親戚の誰が引き取るのか…大もめさ」

両親の死に打ちのめされているウイルの肩をささえてくれたのは、式を

挙げてくれた牧師とその奥さんだけで、遠い親戚は、舞い込んだやつかい事に頭を悩ませていた。

突然、車の音がしたと思うと、大きな男がドアに現れた。帽子をとつたその顔に、覚えがあるのは、親族の中で一番年かさの大伯母

だけだった。

「フランク！ あんた。生きていたのかい！」

「伯母さん。ご無沙汰しております。その子がウイリアムですか？」

「そうだよ。あんたの兄さんの子だ。ウイリアムこっちにおいで」フランクは、その大きな体をかがめ、ウイルを迎えると短く言った。

「今すぐわたしと来るか？ 来るなら連れてゆく」

フランクはウイルの髪をくしゃりと撫でた。

仕事から戻る父親がそうしてくれたのと同じ温かさを感じた。

ウイルは、すぐに頷いた。

父さんの弟？ そんな事初めて聞いた。

全然似ていない。

このおじさんは黒い髪だし、肌の感じも少し違う。

でも、この数日で一緒に来なさいと言つてくれた大人は彼だけだし自分に触ってくれた親族も彼しかいなかつた。

フランクが立ち上がるとウイルの頭は彼の腰より低い。

「この子の身の回りの物は何もいりません。何か形見になる物だけ

渡して

やつてくれませんか？」

親戚は誰も席やその場を動かず、隣やその向こうの者とただ無意味な会話をかわすだけだった。

フランクに対峙する大伯母も、手をこまねいているだけだ。

牧師が小さな写真立てをとるとウィルに渡した。

両親が写っている。

「この家の唯一の財産は、結婚指輪くらいです。それは夫婦とともに埋葬しました」

「牧師様。ありがとうございます。ではこれで失礼します」

フランクは軽く一回を見回すと帽子をかぶり、ウィルの手を引き出て行つた。

牧師は、大伯母に声をかけた「ウィルの叔父さんにあたるのですね」

身なりはいいし、お金持ちのようだ。ウィルは安心ですね」
彼女は、振り返つたが、問題が解決したせいした顔ではなかつた。

「あれは、ヤクザもんです。との昔に縁も切れている。ウィルの父親とは

腹違いでね。母親は得体の知れない東洋人ですよ」

牧師の奥さんは顔を曇らせたが、この冷たい親族をたらいまわしに生活したり、

施設にあずけられるよりは、きっとよかつたのだと思つ事にした。

ウィルは、初めて飛行機にのり、その日のうちにシカゴに降り立つた。

湿った空氣と雨の匂いがする。

初めて見る大きな都会の夜をタクシーが走り抜ける。

瀟洒な石作りの家が並ぶ一画に連れてこられると、その中の一軒の玄

関で白いHプロンをかけた太った中年の婦人が迎え入れてくれた。

「おかえりなさいませ、旦那様。 ウィル坊ちゃん、お腹はすいています

んか？お風呂に入つてから、ミルクと夜食を召し上がり、ゆっくり眠つ

たら、朝ご飯をたんと食べられますよ」

彼女は有無をいわさず、すべてをその通りに実行した。

翌日からもすべてがミセス・マクラフスキーの仕切りで進み、 3ヶ月

を過ぎる頃には、 ウィルは学校に通い、 友達もできて大都会に生活にな

じんでしまつた。

ただ、 フランクが家に帰る事はほとんどなく、 帰つたとしてもウィルが学校にいている間だつたり、 ウィルがもう寝入つてからだつたりで、 まつたく会う事がなかつた。

「おじさんは何のお仕事をしているの？」 ウィルは、 おやつを食べながら言った。

ウィルは自分の生活の基盤がしつかりしてくると、 周りが気になりだしてきた。

「さあてね。 毎週ちゃんとお給金をいただいています。 冷蔵庫にはたっぷりと

肉も野菜もありますし、 坊ちゃんの服はしみ一つありやしません。 いい学校に行つていて、 何の不服がありますね」 彼女も豆をむきながら言った。

「アンナに家族はいないの？」

「お風呂に入つてから、 ミルクと夜食を召し上がり、 ゆっくり

ともに寝起きする氣のいい家政婦アンナ・マクラフスキーの事も気になりました。

「亭主はむかーしに死にましてね。娘は、成人してフロリダにありますよ。

坊ちゃんもよく勉強して、好きな仕事について、好きな町で暮らすことです」

「フロリダは遠いね。僕が大人になればアンナは子供に会える?」アンナは、ウィルの頭を優しくなでてきた。

「坊ちゃん。アンナを早くやつかい払いしたいですか?」

ウィルはびっくりした。

「違うよ!アンナ!僕、アンナがいないと困るよ!」

アンナは静かにほほ笑んだ。

いつもは大口を開けて大きく笑うのに…いつもと違うアンナの顔。その顔はとても上品だった。

「坊ちゃん…。アンナは昔、旦那様に助けていただきましてね。おかげで子供は大人になりました。それからアンナは、ずーと旦那様に

お仕えしています。誰が何を言おうと立派な方です」

第四話　闇の影

第4話　闇の影

「次にエレノアに会つたのは、ずっと後だ」

「ウイルのその両手は強く握られ膝に置かれ、まっすぐ前をみたままだ。

フローレンスは、テーブルに体をあずけたまま、黙つて聞いていた。

「僕は、フランクの庇護のもとで、何も考えずに成長していった。あいかわらずフランクは忙しく、めつたに会えなかつたけど…今思えば、あえてそうしていたんだ。でもわずかの時間でも僕の父親代わりを立派に努めてくれた。一度だけ、休暇をとつて旅行に連れてってくれた事があつた。イタリアに行つたんだ。素晴らしい国だつた。彼は僕に本物の芸術をたくさん観ろと言つてくれた」

ウイルの横顔が一瞬輝いたが、すぐに曇つた。

「あれは…17の夏だつたと思う…アンナは持病の腰痛で寝込んでいて、僕が食事を運んで行つた時にアンナの部屋の電話が鳴つた。僕の部屋にはないのにアンナの部屋には直通の電話があるつて初めて知つた…」

ウイルは受話器を取るとアンナに渡し、部屋を出ようとドアを開けた。

電話の相手は、一方的に何か話しているようだ。

「いいえ！いいえ！どうにか歩いてみます！でも旦那様…でも…それは…」

アンナの悲痛な声がドアを閉めかけたウイルの手を止めた。

「坊ちゃん変わつてください…旦那様からです…」

変わるもの落ち着いた深い声が聞こえてきた。

「ウイル。今から女性が訪問する。わたしの書斎に通しなさい。彼女がそこで必要なものをとる。書斎の鍵がどこにあるかはアンナに聞きなさい。お前は鍵を渡し、受け取るだけだ。部屋には入ってはいけない。約束しなさい」

一言だつて口をはさぬ迫力にウイルは、ただ頷いた。それでよしとフランクは電話を切つた。

すぐに、玄関のベルが鳴つた。

「アンナ。書斎の鍵はどこ？」

白いスーツとそろいの帽子には厚くベールがかかつていて顔がよく見えなかつたが、間違いなく、ずっと前に会つた白いイブニングドレスのあの女性だと思つた。

彼女は、無言で白いバックをウイルに投げ、まっすぐに書斎に向かつた。

ドアノブが「う」ときかないとわかると、彼女は憤然とウイルに向いた。

「鍵は？ 早くして！」

「待つてください…今、持つてきます」ウイルは、はじかれたようにキッチンに向つた。

その背中を追い立てるように女は「早く！」と急いで叫つた。

ウイルは、棚を開けると、並んだ調味料の瓶に目を走らせた。

砂糖 塩 オイル 小麦粉 イースト…押し麦。あつた。

押し麦の瓶の蓋の裏に鍵が隠してあつた。

鍵を受け取ると彼女はドアを大きく開けるのも、もどかしいとばかりに滑り込むように部屋にはいり、すぐにマニラ封筒を抱えて出でた。

ウイルの手からバックをもぎとると閉めた鍵を返してよこし、その

まま出て行った。

「 ウィルの手には鍵がある。

「 坊ちゃん！！後生ですか。」 こちらに来てくださいー！」 アンナが大声でウィルを呼ぶ。

まるで彼の好奇心を見透かすようだ。

アンナはベッドに弱弱しく収まっていた。

「 坊ちゃん。鍵をアンナに返してください」

「 アンナ……鍵をまだ閉めてないから、閉めてくる」

「 いいえ。鍵の閉まる音を聞きました。エレノア様が閉められました」

ウィルは、鍵を渡した。

アンナは鍵を握りしめた手を毛布の中にしまい込んだ。

「 アンナ、彼女は…ずっと前にフランクとパーティーに出かけた女性だよね？ エレノアっていうの？」

「 坊ちゃん。休ませてください。薬が効いてきてやっと眠ります。明日には起き上がれますよ。」 ご不自由かけました

ウィルの目の端にテーブルクロスが舞つたかと思つとバラの花が水をまきちらして大きな音とともに床に落ちた。

「 フラウ！」 ウィルは、床に倒れたフローレンスを抱えた。

彼女は気を失つているわけではなかつたが体はひどく震え、その目は恐怖におびえている。

真つ青になつた唇は何かを言い続けているが、声は聞こえてこない。

彼女は頭をかかえ、ウィルの腕の中で小さく体を丸め震え続けた。

「 フラウ。落ち着いて… あ、ソファーに座つて… 水に濡れてしま

う

腕を腰にまわし、立ち上がりせようとした時。

彼女の髪がスースのボタンにひつかかり、持ち上がつた。

ウィルは、はからずもその耳を見てしまつた。

耳はわずかに土台をとどめているだけだった。

切り取られた… その表現がぴたりだった。

あの時、動搖していたエレノアと今、恐怖に怯えるフラウ…。

離れた時間軸はウィルの記憶の中で繋がつていった。

突然、フローレンスは、強い力でウィルの体を押しのけた。彼女はよろけながらも立ち上がり、守るようにその腕を両肩に強くまきつけた。

「そんな目でみないで…」

「フラウ。僕は何も…」

「みんなが見るの…みんなが口ぐちにささやくの…運び込まれた病院でも…看護婦が噂していたわ…やつてきた警察もみんな、わたしを…さげすむように見たわ…」

「フラウ。落ち着いて、僕はそんな風には思っていないよ」「あの人は違つた。会つたことのない上品な婦人が病院にやつてきたの」

フローレンスは、とても落ち着いた声だ。

「名前は名乗らなかつたけど姉の代理で來たと。彼女は、とても愛情に溢れた温かいまなざしでわたしの頬をなでてくれた。ママみたいだつたわ。その人はわたしに生まれ変わるために必要なものをすべてくれた…。新しい出生証明書には、フローレンス・チエンバーとスつて書いてあつた。彼女は言つたわ。人はチャンスがあれば生まれ変われる。すべて忘れて生きなさいと。わたしは、フローレンスになつて、そしてシカゴを離れてこの町に來たの。6年前よ…」

ウィルは、その言葉を聞きながらも、からみあう記憶にどんどんと絶望を感じていた。

書斎を開けた夜からどれくらい後だつたか、フランクが帰つてきた。ウィルがはやる気持ちでリビングに走り込むと大きな白い帽子が振り返つた。

「ウィル。紹介がまだだつたな。彼女はエレノアだ」

優美な白いレースのサマードレスのたつ、ふりした裾をゆらしながら、嫣然としたほほえみを赤い唇に浮かべ、エレノアはウィルのすぐそばに寄ると、帽子をとった。

彼女は、会つたびにまるで印象が違つて見える。

今日のエレノアは、肩先で髪をかわいらしくカールさせ、白いカチコーシャをして、まるでどこぞのご令嬢のようなりだ。

「すっかり大人になつたわね。前に会つた時はとても小さかつたわ。先夜に会つたのは、なかつた事にしろと言う事なのだろうか。怪訝な気持ちを持ちながら、目の前に差し出された、ぬけるような白い手とウィルは握手をした。

エレノアは、小さく笑うと「レディが手の甲を差し出したらキスするのが礼儀よ」と言つてソファーに腰かけ長い足を組んだ。

「フランク。そういう事、教えてあげなさいな」

「必要ない」

「チヨスは教えてくれたよ」ウィルはフランクが座るソファーの袖に座つた。

「男性は戦う」とばかりね……。いいわ。ウィル。わたしがガールフレンドとつまく付き合える方法を教えてあげる。好きな子いるの?」かわいらしく首をかしげる姿にウィルは、ドキリとしました。

「……別に……今は、勉強が一番だし……あの……それより、あなたは、一体いくつなんですか?」

ウィルは気はずかしいのを隠そつとあわててしまつた。

エレノアは、唐突に失礼な質問に目を瞬いた。

フランクが大声で笑つた。

ウィルは、フランクがこんなに笑うのをはじめて見た。

「す、すみません! その、変わらず若くて美しいので……なんだか時間が停まつたみたいで……」

エレノアは気を悪くした風もなく、バックから細い煙草をとりだすと口にした。

笑いを抑え込んだフランクが火をつけてやる。

「わたしは、秘薬をもっているから永遠に年をとらないのよ。でも他の女性には、けつして聞いてはいけないわ」

彼女の片耳のピアスのダイヤが窓から射した夏の日を受けてきらりと輝いた。

「あの…ピアスが…片方落とされていますよ」

「大丈夫よ。片方しかないの。もう片方はわたしの大事な人が持っているのよ。そんなに緊張しないでウイル。あなたと仲良くしたいわ…学校は？楽しい？」

アンナがワゴンでお茶を運んできたが、三人が楽しそうにたわいのない話に花を咲かせている光景にあまりいい顔をしていない。

「ありがとう。アンナ」ウイルは、素早くそばによると茶器をとり、それをエレノアに渡した。

「ミルク？レモン？」

「いいえ。何もいらないわ。ありがとう」エレノアは優しくウイルを見つめた。

お茶を渡すだけで、彼女の騎士になつた気分だつた。この奇妙な昂揚感は、アンナによつて遮られた。

「ああ！坊ちゃん。忘れました！たいへんだ。キッチンに行つてください！早く！早く！」アンナを助けてください」アンナは、ウイルのシャツを引っ張ると連れ出してしまつた。

「アンナはあいかわらずね」

「エレノア…」フランクは、茶器をテーブルに置いた。いつもの冷静な顔だ。

「ウイリアムには、かかわつてくれるな。あの子はこっちの子だ」

「ええ。わたしのあの子と同じね。でも…わたしのあの子は闇を知つてしまつたわ。あなたも気をつけなさい。彼がいつ囚われるかわからないわよ」

「明日には、すべて整えられる。君が行くか？」

エレノアは、横に置いた帽子をかぶり直すとバックをとり、ドアに

向かった。

「会えるわけないでしょ。アンナにお願いして頂戴。彼女が適役

よ」エレノアは、ドアに手をかけ振り向いた。

「フランク。感謝しているわ。あなたがあの情報を渡してくれたから。でも、あなたには痛手を負わせてしまった…この借りは必ずお返しするわ」

第五話 見えない溝

エレノアが帰ってしまったと聞くとウイルはひどくがっかりした。でも、めずらしくフランクが夕食を一緒にとると言つのでウイルのふさぐ気持ちは一掃された。

ゆっくりフランクと過ごすのはほんとうに久しぶりだつた。アンナもはりきつて、テーブルには乗り切らないほどの料理が並んだ。

フランクは、ワインを飲みながら、ウイルの話に耳を傾け、相槌をいつたり、彼の小さな悩みに適格なアドバイスをくれたりした。時たま、ガールフレンドの事もませたが、少しばかりいいように言ったのは、フランクには、ばれているようだ。

「夢は新聞記者か……」フランクは、ワインのグラスを見つめた。「それかおじさんの後を継ぐか? でも僕はあんまり数字は強くなあからな」

フランクは、少しだけ目線を泳がせた。

「おじさんは公認会計士でしょ? アンナが教えてくれた。いくつもの大きな会社が顧客だつて……お金持ちだから僕を引き取れただね。必ず、恩は返すよ。まつてて」

「恩など感じなくていいんだ。ウイル。お前は兄の子だ。わたしが引き取るのが当然だ」

「でも……知らなかつた。おじさんがいるつて……」

「お前も大人だ。理由は分かるだろ?」フランクは、親指をこめかみにあてた。

それは、その肌と髪と瞳の色すべてをさしている。

ウイルは、そんな事は意味のない事だとわかっているし、気にした事などなかつた。フランクはもつとも近い肉親であることに変わりはない。

「最近、後ろ姿が似てきたつてアンナに言われた。やつぱり血のつ

ながりつてすごいもんだね」

フランクはすっかり大人になつたウィルの事がほんとうに誇らしい
と思った。

そして別れが近づいているのを悲しく感じていた。
ウィルは調子にのつているのを十分に感じながら、ずっと聞きたか
つた事を思い切つて聞くことにした。

「あの。エレノアはフランクの恋人なの？」

フランクの頬に厳しい影が戻つた。

言つてはいけない事を言つてしまつた氣まずい空気が襲うのをウィ
ルは感じた。でも、そんな悪い事を聞いているわけではないはずだ。
もしかして……ウィルの頭に別の扉が開いた。

「僕がいるから結婚できないとか……なの？」

メインの料理を誇らしげに運んできたアンナは、そこに足を止めた。
「ウィル」フランクは、いつも静かな深い声で言った。

「エレノアはビジネスパートナーだ。それに誰であつても彼女を、
恋人や愛人や家庭の主婦にはできない」フランクは、手をかざして、
アンナに合図を送つた。

妙な空氣を一掃するようにアンナは二人の間に大きな体を割り込ま
せた。

「さあさあーアンナ特性のローストチキンですよ！たんと召し上が
れ」

「ミセス・マクフラスキー。あなたも席について。せつかくだ。一
緒に。ウィル。椅子を引いて差し上げなさい」

「まあ！そうですか。では遠慮なく！」アンナは大袈裟に笑い、椅
子を引くウィルにワインクをしてきた。

フランクは主人として、鮮やかな手つきでチキンをさばき、とりわ
ける。

その後は、彼女の日常の世界についての「いま」とした話やウィル
の子供時代の思い出やらアンナの独壇場で終始した。
何も言わないウィルに向つて、フラウは静かに語りだした。

「わたしの本当の名前は、アナ斯塔シア・ヴァルナフスキー……。姉は、エレオノーラ。両親は、ロシア革命で亡命してきたロシア貴族よ。すべてを失つて赤ん坊の姉を連れて亡命したの。わたしは、この国で生まれたから姉とは年がずいぶん離れているの。わたしが5歳の時には、姉は家出をして行方知れずになつた。それから流行病で両親を亡くして、わたしは施設にはいったわ。今まで貧しかつたけれど、施設の生活はもっと酷かった。ある日、きれいな人が迎えに来てくれたの」

「エレノア？」

「そうよ、姉さんが、わたしを救いだしてくれたの。すぐに寄宿学校に入学させてくれたわ。その時にこのピアスをくれたの」

『アナ斯塔シア。これは、お父様とお母様が唯一国から持ち出した宝石よ。皇帝陛下から賜つた品なの。わたし達は一緒ににはいられないけれど、これをお互いに身に着けましょう。そうすればいつも一緒に』

「姉の事を恨んではいないわ。今でも会えるなら会いたい。姉は両親と幼いわたしの暮らしを少しでも楽にしようと、闇の世界に身を投じていった……いつかはみんなで祖国に帰りたいと思つていた。でも革命後の祖国は自由を失い、いろんなものを見失う国になつてしまつた。もう戻る事もかなわない……彼女はいつもそれを憂いていたわ」

フローレンスは、指輪を抜くとそれをウイルに差し出した。

「お返しするわ。わたしの秘密は、お墓まで持つていくつもりだつた。虫が良すぎたのね。まさかあなたが……ずっととかかわりがある人だったなんて」

ウイルは、差し出される指輪を受け取らず、花瓶を拾い上げ、テーブルに置くと、花をそこに戻した。

「フローレンス。僕は、君に起こつた事を知つていて。でも、それで君を嫌いになつたりしない。蔑むなんて、そんな気持ちはみじんもないのは信じてほしい」

ウイルは、まっすぐにフラウの田の前に立つた。

「じゃあ……なぜ、あなたは、この世が終わつたような顔をしてい
るの？」

「それは……」

「気持を隠さないでいいのよ。わたしのような娘に、プロポーズを
する人はいないわ。でも、少しでもまだ優しい気持ちがあるなら……
わたしを一人にしてちょうだい」

フローレンスは、指輪をウイルのポケットに押し込むと、寝室に入
つてしまつた。

鍵の音が二人の間の大きな見えない溝をなぞつた。

ウイルは、さつきとは、えらく違う気持ちでらせん階段を降りた。
外玄関の大きな水たまわりに足をとられ、靴の中に水が湿りとてつ
もなくやりきれない気持ちがその嫌な冷たさのように体中に広がつ
て行つた。

それを捨てるかのようにポケットの指輪を路地に向かつて投げると
道を進んだ。

歩きながら、ウイルは記憶をたどつていた。

フローレンスが言つていた、上品な婦人とはきつとアンナの事だ。

「坊ちゃん！ あの、ずいぶん早いお帰りですね……」

玄関先でぶつかつたその人は、きれいな服を着たアンナだった。
アンナはきれいに化粧をほどこし、彼女の赤毛と緑の瞳によく似合
うバラ色のスースは、太つているばかりと思っていた体にもちゃんと
ウエストがある事をしらしてくれている。背の高いウイルからは、
粋な帽子のピンもよく見えた。

「エプロン以外のアンナを初めて見た。すぐ素敵だよ」

「ありがとうございます。あの、お夕飯の支度までには戻つてまい
りますから」

「デート？ 婦人会？ なんでもかまわないから、ゆっくりしてきなよ。
食事は適当にすますから。楽しんできて」

アンナは、頷きながら出て行つた。

「あら。坊やだけなの？」

ウイルはソファに寝つこうがり、テレビを観ながら、夕食にハンバーガーを食べていた。アンナやフランクがいたら絶対にゆるされない禁止行為だ。

リビングのドアが開いて、エレノアが白いビーズのイブニングドレスで立っていた。ウイルは、バーガーを喉に詰まらせた。

「フランクはまだ？約束しているのだけど」

「あ、あの、約束しているなら戻るでしょう。車が……混んでいる時間だし」苦しい息をコーラで押しこんだ。

エレノアは、そうねと頷くとまるで水の上を進むように歩むと当たる前のようににウイルの隣に座り、頬杖をついてテレビを観た。

ウイルはあわてて子供じみたテレビ番組のチャンネルを替えにいき、ソファーに座った。思いのほか、エレノアと肩がふれあつたので、ウイルは、さりげなくテーブルに食べかけのバーガーを置きながら、ナップキンをとり、ソースだらけの手と口を拭きながら、間をあけて座りなおした。

夕方のニュースが流れた。

エレノアが眉間にしわを寄せた。

また、ギヤングの抗争だ。

レストランで同じ日のボスが襲撃されて、一般人も巻き添えをくんだようだ。

「マフィアは専門のレストランで食事するべきだ！ そうでしょう？」

マフィア専用の道路もあればいい」ウイルは、コーラを飲み干した。

「それでは、黒人差別と同じよ」

「違いますよ。区別だ。マフィアは悪い事ばかりしでかす、ひどい事ばかりする政府も警察ももつと厳しく取り締まればいい」ウイルはテレビを観たまま言つた。横はむけない。すぐそばにエレノア体

温を感じる。ウィルは、咽のあたりが熱くなつた。

「ウィル。ニュースになつてゐるマフィアの事件は、みなが喜ぶ派手で物騒な事件だけよ。物事には裏と表がある。眞面目な会社員だけど、家庭では妻に暴力をふるう亭主もしるし、マフィアのボスが孤児院を建てる事もある。善良な市民が殺人を犯したり、強盗犯が保安官だったこともあるわ」

「ううだけど。でもマフィアのやつてることは理不尽すぎ……」

すぐそばにエレノアの美しい顔があつた。

彼女は体をななめにぐつとウィルのそばに体を寄せている。ウィルの瞳は、驚きでせわしなく動いた。心臓の音が耳元で聞こえている。「きれいな青い瞳ね。わたしを見て……」彼女の細くて長い指がウィルの髪に伸びた。

「あなたこそ……地中海のような青い……色だ」

「まあ。口説き文句が言えるようになつたのね……」エレノアの甘い息が唇にかかつた。「地中海を見たの？」

「子供の時……フランクがイタリアに連れて……」エレノアの赤い唇で言葉をふさがれた。

ガールフレンドとするキスとは違う、頭の中がしびれきつて何も考えられない。背中がソファーについて、エレノアのやわらかい胸が自分の胸に押しあたるのを感じた。エレノアからはとてつもなくいい香りがする。彼女のドレスの背中は大きく開いていて、そのなめらかな肌に触れる事ができた。

ウィルの夢心地は、突然、玄関が激しく開いてしまる音で邪魔された。エレノアは、体を起こすと、素早くそちらに向かつた。

ウィルは、手の甲で唇をぬぐつた。

まるで血のよう口紅がついているのを不思議な気持ちで見つめた。

「ウィル！早く来て！」慌てたエレノアの声が響いた。

またもやドアが開き、今度はアンナの叫び声が響いた。

「ダメです！ダメです！来てはいけません！」

「ウィル！手伝つて……」遮るようにエレノアが叫んだ。

さすがにただならないものを感じ、ウィルは玄関ホールに飛び出た。エレノアが、ホールにしゃがみ込み、そのドレスのビーズから血が下つたっている。彼女の腕の中に、フランクが倒れていた。

「何があったの？」 ウィルは文字通り青ざめた。

「アンナ。ドクターに連絡して！わかるわね。本物の医者を呼ぶんじゃないわよ！」

アンナは、転げるよろよろと奥に消えた。

「ウィル。こちらに回つて。わたしが足を持つから。部屋に運ぶわよ」

「む、むりだよ、僕より背が高い……」

「しつかりしなさい！フランクを玄関先で死なすつもりなの！」 エレノアの形相に、ウィルは従つた。もどつてきたアンナもくわわり、フランクの大きな体をどうにかベッドに横たえた。

エレノアは、ハサミでフランクの上等のスーツやシャツをかまわず切り裂き、取り除き、どこが怪我をしているのか確かめると、タオルをさいて止血し、流れる血を拭いた。

しばらくすると、ドクターと呼ばれるこれと言つて特徴のない中年の男が白衣を着て現れた。

彼が医者らしい黒い診察バックからさまざま器具をとりだし、エレノアとアンナが看護婦のようにそれを手伝つた。

「まつてよ！ どうして救急車を呼ばないの！ これじゃ死んでしまうよー！」

振り返つたエレノアが、ウィルの頬を打つた。

「黙つてなさい！」 きれいに結つた髪は乱れ、白いドレスは真つ赤だつた。

おかしいと、ウィルは思った。アンナもエレノアもこのドクターも……何か共有している。自分が知らない……そんな空気が漂つた。フランクのうめき声が乾いた部屋にくぐもつた。

「気づいたか。もう大丈夫だぞ」

「フランク！ 奴らね！ ロッソの手の者でしょう！ 汚いやつら！ わた

しがかたをつけるわ！」

「もうボスが動いてくれている……お前は黙つていろ」

「いいえ。ボスに任せられないわ。あの件だつて頼んだのよ！妹を助けてくれつて、でも助けてくれたのはあなただつた。あの一件を渡してくれたから……妹は解放されたのよ」

「エレノア……ボスは家族は守る。お前の妹は違う……向こうの人間は守れない……」

「多少のリスクはあると思つたけれど、こんな手で出でてくるなんて……」

「しゃべるな。フランク。よけい血が足らなくなる。誰か、同じ血液型の人間は？」ドクターが周りをみまわした。

「僕が……同じです」

「よし、腕をだせ」ドクターは、止血用のゴムを振り回した。ウィルは、ベッドに腕を乗せるかつこうで床に座り込んだ。

「若いから、多少とつても死にやせんだろ？」

「ドクターやめてください。坊ちゃんに何かあればあたしは生きられません」

アンナは泣き声だ。

「ふん！だいたい、堅気の人間をそばに置くのが間違つていいだろうが。エレノアあんたもそうだ。妹に情をかけたがために、グランデのやつらに誘拐されたんだろう？よりによつてあのグランデだ。フランクがやつらのほしがるロッソの情報を流したから助かつたんだろ？おかげで、フランクはロッソの奴らにこれだ。まあ逆なら、完全に海に浮かんだけどな。ロッソならばこれ以上は手を出さんよ。ボスが動いたならなおさらだ」

ウィルは、血がとられていいせいだけではなく、気分が悪くなつていくのを感じた。彼らが言つてることは、まるでテレビで見るギヤング映画の中で言い交されるようなものばかりだ。

ウィルの気持ちに気づいたかのようにフランクの手が伸びて、ウィ

ルとの管でつながる手に力なく触れた。

ウィルは、フランクの顔を見つめた。

真っ青なその顔は、ぐっと年老いて見える。

フランクはいくつなんだろう。聞いたこともなかつた。

その手は変わらず、温かい。

ウィルはただ、管を流れる血をじっと見つめた。

それは血液型が同じだけでなく、肉親のつながりのある血なのだ。

ドクターの遠路ない血の取り方のせいもあつてウィルは、一人で歩けず、彼に支えられて部屋のベッドに体を横たえた。

「ドクター……」ウィルは、男に声をかけた。

みんな何も教えてくれない。この男ならなんでも話してくれそうだ。

「これ以上は、はなさんぞ！ フランクに殺される

「フランクも人を殺すの？……」

「……むむ… フランクは金庫番だ！ マフィアにもいろいろ役目があるんだ。もうしゃべらんぞ！」

ウィルは胸がざわめいた。

「やつぱり、マフィアなの……アンナも？」

ドクターは、鞄の中をごそごそと探り、薬と注射器を取り出した。

「アンナはロシア人だ。アンナは若い頃にロシア革命を逃れてこつちに来た。皇帝に仕える女官だつたそつだ。まあ今はどこにそのお上品さをやつちまつたのかなつてな……はつはつ！」ドクターは、何かの注射をウィルの腕に刺すと立ち上がりながら、鞄に使つた器具を放り込んだ。

「なあ坊主、お前は、まだ高校生だつ？ それでも色々あつたつうよ？ 俺たちはお前の倍以上も生きているんだ。もっと色々ある。大人になればなるほど事情も複雑になる。自分の責任においてそれを解決していかなならん。それをとやかく言うな。な？」

彼は、まるで鉛を持ち上げるように小さくうめきながら鞄を持ち上げとドアにむかい、おおそうだと振り返つた。

その顔はにやけていた。

「坊主。口がピエロみたいになつていてるぞ。ふいとけよ」やけに糊がきいた清潔なハンカチを投げてよこした。

どれくらい眠つたのだろうか…。

額に感じた冷たさでウィルは目を覚ました。

「気分はどう?」エレノアの甘い声が耳元に聞こえた。

ウィルは全身で驚いたが体は重く、跳ね起きる事はできなかつた。

「少し熱がでたのよ……」

スタンドのわずかな明かりが絹の白いナイトガウンに金髪の巻き毛が流れているのを浮き上がらせている。

「今夜は泊めてもらうことにしたの」言いながら、今度は頬の汗をふき、その手が首に流れた。

「ア……アンナがそんなおしゃれな寝間着を着ているなんて……意外だな」

ウィルは、またエレノアがキスしてくれたらと妙な気持ちを持った。
「借りたのではないの。わたしのよ。女のバッグにはいろんなものが詰まつていてるのよ

タオルは、首からシャツの襟元にはいり、両の肩を拭ぐと、エレノアはタオルを外に出し、横に置いた洗面器の冷たい水にゆらした。氷の冷たい空気がわずかに流れてきて、ウィルは冷静さを取り戻した。

「あなた達はみんな マフィアなの?」

「一言で片付けられるものではないのよ」エレノアは白い肩で答えた。

「妹さんは……無事に戻つてきたの?」

エレノアは少しこちらに横顔を向けた。

「ウィル。妹はあなたと同じ年よ。まだ高校生よ」

ウィルは、息を飲んだ。同級生の無邪気な女の子達が浮かんで消えた。マフィアに誘拐されるなんて、どれだけ怖い思いをするのだろう

う。

「あの子は違う土地で生まれ変わるの……」

「どうして……？」

「誰に」であれ誘拐された娘が世間にどんな蔑まれた目で見られると思つの？だから違う名前を与え、違う人生を歩ませるのよ。でもそれも組織の力だわね……皮肉だわ」

あの夏の夜、ベールで隠した顔から、ちらりと見えた唇は色を失い、鍵を開ける手は小刻みに震えていた。

「マフィアは誘拐すると体の……一部を切り取つて送りつけるって本当？」

エレノアは、立ち上がると、いつもの優美な足取りでドアに進みドアを開けた。廊下の明かりがエレノアの全身を縁どつて輝かせた。

「おやすみなさい。ウイリアム」

翌日には、ウイルは体調がもどつたが、すべてに違和感を覚えた。「まあ。坊ちゃん。やはりお若いですね。朝食を召し上がれそうですね。今、旦那様の様子をみてから、すぐに戻りますから。あ、好物のチエリータルトも焼きましたよ」アンナは、まるでフランクは風邪を引いて臥せつているだけみたいな言い方だ。

ダイニングに入ると、驚いたことにエレノアが皿などを並べていた。シンプルな白いティードレスは、飾りがなくとも引き立つて見える。「おはよう。ウイル。ドクター。お茶にする？ ハーブティーかしら？」

「俺には、熱いコーヒーをくれ」

ドクターの声にウイルは驚いて振り向いた。ドクターは、あぐびをしながら、乱暴に椅子を引くと座つた。

「ウイルは？ ミルクを温めましょうか？」

ウイルは、あからさまに子供扱いされ、不機嫌な顔を向けた。

「受け入れなさい。すべて真実よ」エレノアは、きつぱりとした声で言った。

「おまたせ致しました。すぐに用意ができますからね。みなさんお

腹がすいたでしょ？ アンナがキッキンに急いだ。

「頼むよ。アンナ。なんでもいい早く食わせてくれ。食つたら、仕事に戻る。フランクはもう大丈夫だ。また夜に様子を見に来る」

「今は、仕事は何を？ ドクター？」 エレノアが聞く。

「今は、どでかいビルの上から下まで掃除している。骨がおれるが情報は入りやすいな」

ウイルは、目だけでまわりを見回した。

アンナ。エレノア。ドクター。

「どうした坊主。頭に血が行つてないのか？いいや。まわりすぎたかな……刺激がつよすぎでや」 ドクターは、下衆な笑いをおさえなかつた。

ウイルは、目線をずらしたが、まともにエレノアの青い瞳にぶつかってしまい、今度は下を向くしかなかつた。その先にアンナが卵料理の皿を置いてきた。

「アンナ。今日は学校を休んでいい？ 行く気分じゃないし……」

アンナは、エレノアと皿を合わせ、エレノアが口を開いた。

「いいわ。ウイル。そうなさい。——皿は、家から出ないようにしてちょうだい」

ウイルは、いらついて卵をフォークでつついた。「僕はアンナに聞いたんだけど」

「坊ちゃん。エレノア様のおっしゃるとおりになさつてください」

ウイルは、ひどく不快な音をたててフォークを皿に置いた。

「馬鹿が！ いじけている場合じゃない！ お前が危険だから、みな心配しているんだ！」

ドクターはウイルのシャツをつかみ上げると椅子から立ち上がりせた。十分にウイルの方が背が高いのを気づかせない迫力があつた。

「僕は、マフィアじゃない！ 関係ない！」 ウイルの気持ちに火が付いた。

アンナがそばによつて、ドクターの腕をはなせると、ウイルの肩を抱いて椅子に坐らせた。ドクターは、椅子に憤然と坐ると、目の

前の皿を平らげだした。

「俺たちの仲間は、ロッシやグランデの極悪かつ馬鹿な組織とは違うぜ。政府の高官も仲間にいるんだ。格が違つ。変な皿で見ないでくれ」

「マフィアは、それ以上でも以下でもない」 ウィルは、まだ血氣だつていた。ドクターはナイフとフォークを強く握つた。

「ドクター。いいのよ。どちらにせよウィルは、この家を出る日は近いのだから」

ウィルはこんな所にいたくないとばかりに立ち上がつた。

「家を出るつて？もちろん出でいく！秘密がばれたから、置いとけないんだろう？殺さないのはお情け？」

「坊ちゃん！」 アンナが泣きそうな顔をしている。

「ウィル。違うのよ。あなたをそばに置くのは、相当な危険を伴つてている。足を引っ張りたい人間は一杯いるの。わたしがされたようにな。だから、あなたが成人する18までは、フランクと仲間が守り続けるけどそれ以降は、もう一度も会えなくなるのよ。あなたを引き取る時にフランクが決めた事なの」

ウィルは、エレノアの皿に嘘がないのを感じると、体中の力が抜けてゆくのを感じた。

「お坐りなさい」 ウィルは素直に椅子にかけた。

「じゃあ……エレノアの妹は？守りに失敗したの……？」

ドクターが口をはさんだ「わかんねえ奴だな。フランクはトップだからだよ。特別だ。普通は、素人なんぞ守らねえ」

「ドクター。仕事に遅れるわよ」 有無をいわせないエレノアにドクターは、口にチャックする仕草で答えた。

「ドクター。サンド・ウィッチとチエリータルトをお皿のお弁当に……」

アンナは、何もなかつたかのように笑顔で紙袋を差し出し、ドクターは、ありがたいと受け取つた。

「懐かしいわ！あのタルトね！」 エレノアもそれにならうように嬉

しゃべって言った。

「はい。このタルトの秘密の隠し味をお教えたのは、あなたのお母様にだけです」

「わたしは、作った事はないけど、妹は、受け継いでいるわ」
ウィルは、一人のやりとりを偶然と聞いていた。

ウィルは、二人のやりとりを呆然と聞いていた。

エレノアもロシアの亡命者。アンナの件がきっかけでアランクと仕事を始めた。縁ってもつて、妙なもんを引き合すもんさー

「アンナの件つて？」 ウィルは小声で聞いたがエレノアが冷た

線をよこしたのでエクターは、あわてて残りの一ヒーをあおいで、口にあふれさせ、しみのないクロスを汚し、今度はアンナに睨まれ、

第七話 アナ斯塔シアとフローレンス

フローレンスは、ウイルが出てゆくドアの音を背中で受け止めた。胸が張り裂けるような思いを抱えながら、はじかれたように鏡台の引き出しを開けると、下の方に隠しておいた手紙を取り出した。それは、一年前に届いた。

フローレンス様

わたくしを覚えておいででしょつか？

病院でお会いしました者でござります。

わたくしは、エレオノーラ様の遺言をお預かりいたしました。エレオノーラ様がお亡くなりになりました。

ご病気でした。

とても、安らかにご両親の元へ、旅立たれた事をお伝えいたします。エレアオノーラ様からのお言葉を伝えさせていただきます。

直筆のものは、もうございません。

そういう決まりなのでおゆるしください。

愛しいアナ斯塔シアへ

もう一度あなたに会いたかった。
でもかないそうにあります。

わたしは天国であなたを見守ります。

いつかあなたが、愛する人に出会い、その人からも愛され、
幸せな人生を歩んでいくことを願っています。

エレオノーラ

フラウは、名前を変え、ずっと噂の届かい誰もしらない遠い町にやつ
てきてもなるべく人に会わないような仕事を選んでひつそりと暮ら

していた。ずっと人が怖くて、笑顔をむけてくれる人にも恐怖を感じていた。

この手紙を受け取って、彼女はその暮らしをやめた。あえて、多くの人に触れなければならぬ、デパートに勤め出した。亡くなつた姉の想いを無駄にしてはいけない……それだけの気持ちが彼女を突き動かしていた。

新しい友達もできた。聞こなれない名前で呼ばれる事に慣れ、当たり前のように笑えるようになった。でも、友達がボーアフレンドの友人を紹介するからWデートをしようとかの誘いには素直に受けることはできなかつたし、ダンスパーティーにも行かなかつた。

知つている人であつても体に触れられるのがたえられなかつた。

「フラウは初心で男嫌いね」と女友達に肩をすくめられてもかまわなかつた。

そんな頃、デパートの取材担当としてウイルがやつてきた。新米の記者らしい、一生懸命さがまわりのスタッフに受け入れられていたが、フラウには、彼が何かから逃れるように仕事をしているように思えた。いつも楽しそうな色を浮かべる瞳の奥に時折、違うものを感じた。

互いに孤児だつたと知り、よく話をするようになつた。

でもウイルが夕食や映画に誘つてもフラウは、いろいろ理由をつけて断つた。

「日曜日の公園で、お日様にあたりながら散歩だけしない? 日が暮れる前に家まで送るつて約束するよ」

ある日のウイルの誘いに断る理由が見つけられず、フラウは頷いた。

何度も、短い昼間の散歩デートをしたろうか。うつかり手が触れてもあわてるフラウにウイルは嫌な顔をしなかつた。

フラウは彼を愛するようになつていた。自分にそんな気持ちが起ころなど生涯ないと思っていたのに。

ダンスパーティーにフラウがウィルと現れた時は友達がみんな驚いたが、すぐにみなが笑顔で迎えてくれた。

でも、今夜、すべて壊れてしまった。

ウィルは、「アナ斯塔シア」に起きたを知っていた。二人は、ずっと前から皮肉な運命でつながっていた。あんまりだ。

それから、ウィルは、それ以上に何かの秘密を抱えている。それが二人の間を絶望的に引き裂いた。

それは、なんなんだろう。

ほんとうに克服できない問題なのだろうか。いいえ。そんなのは都合の良い慰めだ。自分のような目にあつた娘と結婚したいなどと思うわけがない。

あの事件以上につらい事はないと思っていたのに……。フローレンスは、泣くことができなかつた。とうの昔に涙は枯れてしまつたのだ。

ウィルは、アパートの鍵穴にうまく鍵がさせずにいた。あまりに鍵穴に奇妙な音をたてたせいか、隣の老婦人がそつとドアから顔を出した。

「あつ……すみません」鍵がやつと開いた。ウィルは中に滑り込みながらひきつた笑いを向けた「おやすみなさい……」

部屋に入るとまつすぐにクローゼットの奥深く、棚の上にしまい込んだ箱をたぐりだしていた。

手がすべり、中身をぶちまけてしまつたが、かえつて探しやすくなつたとばかりに、田をはしらせ、一通の手紙を探りだした。

第八話 別れ

「おはようございます。坊ちゃん。旦那様がお呼びです。学校に行かれる前にいらしてほしいそうです」

ダイニングに入ったウイル^{gaga}アンナにそう言われたのは、フランクが怪我して帰つてから3日たつたある日。ウイルは、今日から学校に行くようにエレノアに言っていた。

フランクは、ベッドに起き上がっており、少なくとも見た目はいつも彼だった。髪はきちんとして、顔もきれいにあたつてある。寝間着さえ、しわひとつない。

「そこに座りなさい」

ウイルは、ベッドの横の椅子に素直にかけた。

「すまなかつた、ウイリアム。お前には何も知らせないつもりでいた。なのに最悪な形で唐突に伝える事になつた」

「18になつた途端にどうやって放り出すつもりだったの……無理だと思う。何も知らせなんて」ウイルはカーペットの柄を見つめながら言った。

「お前は、カルフォルニアの大学に行くといつていたし、とにかく遠く離れた時をチャンスにわたしは、事故で死ぬ事になつていた。ちょっとした連絡ミスで、お前がもどつた時には墓に埋葬済みという算段だった」

「マフィアってハリウッドかスパイ並みだね」皮肉を含んで言い放つた。

「簡単に口にしてくれるな。一言では、片付けられない……」

「彼女もそう言つていたよ。でもマフィアなんでしょう。……本当の父親より、叔父さんをずっと好きだった。叔父さんみたいになりたいって思つていた」

フランクは、悲しい目でウイルを見つめた。ウイルは、フランクから目をそらした。

「今後の進学の資金にはお前の親が残した金を使う」
「ウィルは、はじかれたようにフランクを見た。

「親のつて……財産なんて何もないって……牧師さんが言つていた。

はつきり覚えている「

「ウイリアム。兄はお前にわずかな金を残していた。それを大伯母と牧師が搾取した」

「そんな……」

あの牧師さんが……彼だけが僕に優しかった。

「信じがたいだらうが真実だ」

「齎したの?」

「きちんと弁護士をたて、まつとうに行つた。書類もある」

「二人は警察につかまつたの?」

「付き出さないかわりに、金を返させた」

ウイルは、エレノアが言つた言葉を思い出していた。
善が悪を持ち、悪も善をもつ。

「ウイル。つらいがすべて事実だ」

フランクは傷が痛むのか顔をしかめた。ウイルは、咄嗟に手を差し伸べ、枕を低くし、体を横たえさすのを手伝つた。

「ありがとう……」

「水を飲む? 薬? アンナを呼ぼうか?」

フランクは、片手で遮つた。

「ウイル。お前の金は、この好景気に投資して、3倍になつた。だからそれで大学に行きなさい。言つておくがまつとうに投資しただけだ

「わかつたよ。もういい。僕こそ、ごめん。ひどい事いつた……あ
の一つだけ教えてほしい」ずっとウイルは気になつていた。

「アンナは……アンナもマフィアなの?」ウイルは、割れる寸前の風船を持っているような顔をした。アンナは、ウイルにとつて母親と同じだった。

「アンナはソ連のスパイだった

「え？」

思わぬ答えにウィルは聞き返した。

「ソ連は、アメリカに亡命した者の弱みを握り、アメリカでスパイ活動をさせていた。アンナは、夫と幼い娘が国に残っていた。彼女は、皇帝の女官だったから、その立ち居振る舞いが認められ、政府高官の邸で働き、情報を長いことっていた。その頃わたしは、そういう者を見つけ出し、味方につけ二重スパイに仕立てる仕事をしていた」「そういうのって、CIAの仕事じゃないの？」テレビドラマでまさにそういう番組があった。

「CIAだって公務員だ。何かあれば保障が必要だが、われわれがつかまつて殺されたって、政府は痛くもないからな」「じゃあ……アンナは今もスパイ活動をしているの？」

「ずっと昔の話だ。アンナは、今はただのアンナだ。娘も無事に亡命できただからな」

ウィルは、子供の時に、アンナがフランクは恩人だと言つたのを思い出した。

「エレノアも最初はそうだったの？」

「そうだな。まあ。少し違うが……。さつきも言つたが一言では片付けられない」

ウィルは、唇をかんで組んだ指を強く握つたり開いたりしながら考えをねぐらせていた。聞きたい事は山ほどある。だが全部に答えてもらえるわけはない。

「フランクとエレノアって随分、長い事、仲間だよね。彼女はすぐきれいだし、好きになつた事ないの？それかほかの仲間に嫉妬されたりとしないの？」

「ウィル。前に言つた通りだ。確かにエレノアは、お前にとつて魅惑的だらうが彼女のここで見せてている顔がすべてじゃない

「フランクも？」

その瞳には、真実が知りたいと書かれている。

フランクは、ひどく落ち着いた彼の言い方に聞きたいのはそっちか

と理解した。ほんとうに子供だと思っていたのに言葉を仕掛けたくなるようになつたとは。驚きだ。だが彼の方がまだまだ上手だつた。

「お前、ガールフレンドが一人いるだろ?」

「え? 何?」 ウィルは、突然ふられた思わぬ展開にあわてた。

「知つているぞ。金髪とブルネット。一股かけるとは最低の男がすることだ。それだけは言っておかないと死んでも死にきれん。まったくそれを知つた時は悲しかつた。お前をそんな情けない男に育てた覚えはない。」

「僕の事を見張つているの!」

「お前を危険にさらさないためだ。最低限のプライベートは守つておる」

「そ……そんな……。守るつてそういう事なの」

「すぐに二人と別れなさい」

「えつ、その二人ともいつぺんに? ふつうはどちらかにじやないの?」

「二人と付き合えるのはどちらとも真剣に向き合つてない証拠だ。本当に好きな娘に出会えば、他に目はいかんはずだ」

「初めて聞いた…… フランクつて意外にロマンチストだね……」 ウィルは顔を下に向けて言つた。

「ウイリアム。女性を女性の事で悲しませるのは最低の男がすることだ。お前にそういう男にはなつてほしくない」

「それつて……おじいちゃんの事?」

ウィルの記憶に残る祖父は、ただ愉快な人でしかない。彼が妻の他にも子供を産ませたなんて田舎の町ではすごいスキャンダルだつたのだろう。しかも相手は東洋人。家出をした「弟」の事は、家族の記憶からもその町からもかき消された。

「彼は……優しいが弱い人間だつた。お前は、じいさんと兄貴によく似ている。まったく似なくていいところが似るもんだな」

「パパも?」

「兄貴は、町で一番もてたな。彼とデートしたい女の子は後をたた

なかつた。踊りが上手くて、女の子が好みそうな話題を知つていた。
でも兄貴がデートに誘つても一人だけイエスと言わない子がいた
「もしかしてそれってママ?」 ウィルは、嬉しそうに椅子からベッドはじに座りなおした。少し笑つてはいるフランクの顔を真正面に見
た。

「そうだ」

「でもママはパパと結婚した」

「兄貴は、浮ついた所もあつたがまわりに疎まれる私を弟として扱つてくれたし、いじめつ子には、立ち向かつてくれた。ある日お前のママが町に引っ越しして来て、あいさつがわりにデートに誘つて断られた。彼には初めての事だ。何度、手紙をもたされて彼女の部屋の窓の下に使いに出されたかわからなかつた。手紙に菓子が付くときは、一緒に食べようと言つてくれる優しい子だつた。私は兄貴の良い所を力説したよ」

「じゃあ。フランクがキュー・ピットだね」

「そうだな。でも私は15で家出でしたから一人が結婚したのも子供が生まれたのも知つたのは、一人が事故で亡くなつたのを知つた時だ」 フランクはウィルの手をとつた。「なんとしてもお前を引き取りたかつた。それがあの町で唯一、優しくしてくれた彼らへの恩返しだと思つた」

ウィルもその手を握り返した。

「パパはママを愛してはいた? おじいちゃんのよつこはならなかつた?

「二人はとても愛し合つていた。お前もそういう相手にいつか出会
う その引き出しを開けなさい」

ウィルは、小さなライティングディスクに向い、言われた通りにした。浅い引き出しには、小切手帳と万年筆だけが入つていた。

「小切手帳は、さつき言つたお前の金だ」

ウィルは、万年筆を手に取つた。それはとても高級なペンだとす
ぐにわかつた。

「それは、わたしが家出をする時に父がくれたものだ。それが彼の精一杯の親心だった。記者になりたいのだろう？ 良いペンを持つべきだ 受け取ってくれ」疲れたのか、フランクは小さなため息をつくと目を閉じた。

「おじいちゃんは、なぜこんな高級な万年筆を？」祖父も父も農場を嘗んでいた。ペンは書ければいい。

「血は争えんだな。彼は記者になりたかったんだ

「軽快なノックの音とエレノアが現れた。

「ウィル、早くご飯食べなさい。学校に遅れるわよ。フランク。包帯を替えるわ」

ウィルは、妙な錯覚に陥った。フランクとエレノアが自分の両親だつたら、素敵だろうと。

「なあに？ わたしの顔に何かついているかしら？」エレノアは、椅子に坐りながらほほ笑んだ。

「別に、二人が、僕の親だったら、楽しいだろうなって

「あら。 それは年が近すぎるわよ」

「騙されるなウィル。エレノアは実はアンナより年上だ」「ドクター以上に痛くしましょつか？」エレノアは鋏を掲げ、おどけた口調で言った。

「勘弁してくれ。奴の腕はいいが纖細さにかける」

「彼は意外に纖細よ。糊のきいたシーツでないと寝れないのだからエレノアもフランクも笑っている。

朝の陽ざしがやわらかく入る部屋は妙な幸福感に満たされた。ウィルはいつまでもこうしていたいと思つた。

「僕も仲間にして……」

二人ともこちらを見なかつた。

エレノアは背中を向けたまま、フランクも天井を見ている。

「仲間になれば、別れなくていいでしょ？ 一緒に暮らさないにしても、たまに会えるなら。なんか、別に悪い事ばかりしているわけじゃないさそうだし、他の仕事もしてもいいみたいだし、僕は目指す、

記者になる。それとたまにフランクやエレノアの仕事を手伝えばいいだろう！ そうしたい。どうすれば仲間になれるの？ 契約書に血文字でサインするとか？！」

はやるウイルをエレノアが優しく遮った。

「ウイル。アンナが遅刻しやしないかやきもきして待つているわ。学校は何時に終わるの？ 寄り道せず、早く帰つてらつしゃい。みんなでお夕食を食べながら、話をしましょう」フランクの方に向きながら「それでいいわね？ フランク」「

フランクも小さく頷いた。

「あ……えつと。4時にはもどるよ。わかった。アンナの血圧上昇るわけにはいかないね」ウイルはドアに手をかけながら言った。「じゃあ後で」

「ええ。待つているわ」

エレノアは、それは優しい笑顔で見送ってくれた。ウイルはフランクに見えるようにペンを持つ上げウインクしてドアを出た。随分とげんきんな自分に驚く気持ちもあるがそれ以上に、これが一番の自分の気持ちだと想到了。

ダイニングに入ると、テーブルのトーストを手にしながらアンナの頬にキスをし「行つてきます！ 夕食は、じちそつにして！」と言い残しウイルは学校に急いだ。

見送るアンナの顔の悲しい色には気づかなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2535w/>

in the darkness

2011年11月17日17時46分発行